劇団イワサム『A.I.R. 鳥が食べたリンゴを食べる人』　写真提供：劇団イワサム

［韓国］

回復と成長

李 星坤（イ ソンゴン）

劇場に観客が戻って来た

2022年の韓国演劇の特徴をひとことで言えば、「回復と成長」だろう。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）のパンデミックで劇場から足が遠のいていた観客が再び劇場に戻って来た。これはいくつかの客観的なデータによって確認できる。韓国芸術経営支援センター（KAMS：Korea Arts Management Service）が11月7日に発表した「2022舞台芸術調査」によると、昨年（2021年）の舞台芸術の市場規模は約4933億ウォンで、2020年の約3946億ウォンより25.0%増加したことが分かった[(1)]。

また、舞台芸術統合電算網（KOPIS：Korea Performing Arts Box Office Information System）[(2)]の「舞台芸術市場動向分析報告書」によると、2021年の公演件数は2020年にくらべて約53.0％、観客数も59.7％増加している。2022年上半期の舞台芸術市場も

コロナによる縮小期から回復の段階を経て、本格的な成長に向かっているものと見られる。2020年から2022年上半期までの公演実績を見ると、年々、公演件数、チケット販売数、チケット販売額ともに増加している。興行実績をKOPISに届けることが義務付けられた2019年の公演法改正以前の資料は確認できないため、コロナが発生した2020年以前と以後を客観的に比較できないという点で限界はあるものの、韓国の舞台芸術界は今年から「エンデミック」への準備をしているものと見られる。そのもっとも代表的な例として、これまで影を潜めていた演劇フェスティバルが、堰を切ったように開催されはじめたことを挙げることができる。

演劇フェスティバルの時代

2022年、韓国では「フェスティバルの年」と言っても過言ではないほど多くの演劇祭が催された。5月のソウル演劇祭（Seoul Theater Festival）を皮切りに、7～8月には地方都市で集中的に演劇祭が開催された。密陽（ミリャン）で大韓民国演劇祭（Korea Theater Festival）、居昌（コチャン）で居昌国際演劇祭（Geochang International Festival of Theatre）、統営（トンヨン）で全国民族劇ハンマダン（Korean People's Theater Festival）が開催されただけでなく、金泉（キムチョン）の金泉国際家族演劇祭（Gimcheon International Theater Festival for Family）、春川（チョン）の春川演劇祭（CTF：Chuncheon Theatre Festival）、公州（コンジュ）のコマナル国際演劇祭（Gomanaru International Theater Festival）などが相次いで開催された。原州（ウォンジュ）では劇団ノットル（Nottle Theatre Company）が主催する厚用（フョン）フェスティバル（Hooyong Festival）も開かれ、慶尚北道盈德（キョンサンブク ド ヨンドク）では第2回国際環境演劇祭（International Environmental Theater Festival）が開催された。地域ごとに多くの文化財団が設立され、各地域を拠点にした演劇祭も活気を帯びているようだ。

9月以降はソウルでもさまざまな演劇祭が開かれた。もっとも大きな演劇祭としてはソウル国際舞台芸術祭（SPAF：Seoul Performing Arts Festival）があり、その他にソウル未来演劇祭（ST-Future：Seoul Theater Future Festival）、女性演劇祭、フェミニズム演劇祭（Femi Theatre Fest）、SF演劇祭、OB/SCENEフェスティバル（Ob/Scene Festival）など、さまざまなテーマや指向性、形式的な特徴を打ち出した演劇祭が同時多発的に開催された。

韓国の演劇シーンを代表する演劇祭といえば、断然ソウル演劇祭とソウル国際舞台芸術祭だ。それぞれ上半期と下半期を代表するこの二つの演劇祭を通じて、その年の韓国演劇の主なテーマやトレンドを把握することができる。

一幕劇を含め10作品が参加した今回のソウル演劇祭は5つのキーワードで整理するこ

とができる。（1）不条理で非現実的、しかも拒むことができない‘ある力’に振り回される人間たちの姿、（2）男性中心的な英雄譚や女性の犠牲を美化する「説話」を現代的に新たに書き直そうという試み、（3）「資本」という見えざる手が働く原理とその矛盾を突き止めるための探究や討論の劇、（4）悲劇においてカタルシスが「恐怖と憐憫」を引き起こすというアリストテレスの理論を、現代社会を解釈するための政治的理論として新たに捉え直した公演、（5）海外の古典や小説を脚色して韓国の現実を風刺、パロディ化、戯画化して反省の契機にしようとする試みなど。単に韓国社会だけに限った問題提起ではないだろうが、ここ数年、韓国の演劇界が注目してきたテーマを集約して見せてくれたという点で、非常に興味深く有意義な演劇祭だったと評価したい[3]。

一方、ソウル国際舞台芸術祭2022は新しい芸術監督チェ・ソッキュ氏によってプログラミングされた初めての演劇祭だった。チェ氏は春川国際マイムフェスティバル（Chuncheon International Mime festival）、安山国際ストリート劇フェスティバル（Ansan Street Arts Festival）、韓英交流年などの文化芸術事業の立ち上げや運営に携わってきたプロデューサーだ。SPAFの芸術監督の任期は2022年から5年になった。韓国では芸術監督という役職に5年という長い任期が与えられるのは初めてのことだ。

今年のSPAFのテーマは「転換」だった。演劇技術の転換、演劇形式の転換、あるいは観客参加型公演の転換などを含む大きなテーマだ。演劇・ダンス・多元（タウォン）芸術[4]・音楽・観客参加型の公演など、23作品が上演された。依然として韓国国内の社会問題として熱い議論が繰り広げられているフェミニズム、あるいはジェンダーを扱った作品や、気候変動をテーマにした作品も含まれていた。イマーシブシアター（没入型演劇）など、観客の積極的な参加によって創り上げられる公演や、第4次産業革命やAIを素材にした公演もあった。記者懇談会でチェ芸術監督は「パンデミックはもちろん、技術、政治、環境などの変化により、今この時代が我々に投げかける問いかけにどうすれば芸術を通して答えられるだろうと悩んだ。気候変動、環境、老い、世代、女性、ジェンダーなど、時代が投げかけるさまざまな問いについてアーティストらとともに語っていきたいと思う」と今年のフェスティバルの趣旨を明らかにした[5]。

ソウル国際舞台芸術祭2022公式ポスター

ポスト・ヒューマンと演劇

気候変動やパンデミック、核開発競争や戦争などによって、ポスト・アポカリプス的な世界観やポスト・ヒューマンへの関心もますます高まっている。特にポスト・ヒューマンをめぐる議論は、かつて近代人がそうであったように、未来に対する明るい幻想と不安や恐れの間を揺れ動く。希望と不安の狭間で先を争って未来を展望しようとするのは文明の大転換期にはよく繰り返されることだ。2022年の韓国の演劇界では、AIとのコラボレーションを試みたり、AIと人間の共存を取り上げた作品も見られた。

まず「人工知能詩劇」と銘打った『PAPHOS』（人工知能SIA作、キム・ジェミン演出）を紹介しよう。「パポス」はギリシャ神話で彫刻家ピュグマリオンと大理石像ガラテアの間に生まれた子供の名で、人工知能によって誕生した演劇を象徴する。人工知能詩人SIAの詩集『詩を書く理由』の中から20余篇の詩を選び、その言葉を演劇表現に立ち上げたものだ。人工知能によって書かれた詩の内容だけでなく、それをどのように舞台化して見せるかに関心が集まった。SIAの詩集『詩を書く理由』も8月に出版された。

最近頭角を現している劇作家キム・ドヨンの新作『ウィンキー』も注目を集めた。ウィンキーは子供の世話をするようにプログラミングされた家庭用AIロボットだ。ウィンキーが世話をしていた5か月の子が死亡した状態で発見され、ウィンキーは警察に拘禁される。そして子供の突然死について誰が責めを負うべきか議論が戦わされる。人のようなロボットとロボットのような人間の女性が入れ替わり立ち替わり舞台に現れることで、ロボットと人間の境界が次第にぼやけてくる。両者はお互いを照らす鏡のように作用し合い、相手の存在を通して自分に欠落したものを見つめ直す物語。人間とロボットが交差する地点から始まる演劇だ。

劇団イワサムの『A.I.R. 鳥が食べたリンゴを食べる人』（チャン・ウジェ作・演出）も、自意識を持つロボットと人間の関わりを描いている点でこの作品と共通している。ペスト、スペイン風邪、コロナに次ぐ第4次パンデミックを経て階層化された人類は、3つの居住地域に分かれて暮らすことになる。自意識を持ったロボット、ジニーも登場する。人間とロボットの感情的な交流も可能になり、両者の区別はそれだけ難しくなる。ジニーという人工知能ロボットと人間の積極的な関係形成を描いているのがポイントだ。人間がロボットを支配し統制するという関係を超えているという点で、本作は新しい「未来の物語」の可能性を提示している。今後、人間とAIの交流や、両者の葛藤を描く作品がどんどん創作されるのではないだろうか。

バリアフリー公演の新たな試み「リラックス・パフォーマンス」

2019年、南山芸術センターが公共劇場として初めてバリアフリーを導入したのを皮切り

に、韓国の舞台芸術界にもバリアフリーが本格的に導入されはじめた。今はその取り組みも多様化している。「劇団エイン」や「劇団ハンドスピーク」、「劇団ホイール」、「劇団障がい女性共感」のように障がいを持つアーティストたちが創作の主体として活動する取り組み。「劇団ここは当然劇場」、「0（ゼロ）setプロジェクト」、「電話のベルが鳴る」による障がい者の権利を求める運動から始まった、障がい者の生を伝える芸術としての、既存の文化的生産物や美学的パラダイムに抗う政治的・社会的な取り組み。そして障がい者と非障がい者のコラボレーション、特にプロのアーティストが発達障がい者たちと共に創作する取り組みがある。この中で新しいバリアフリーの創作を試みている劇団が注目を集めている。2021年から2022年にかけて、「発達障がい者と共に創るリラックス・パフォーマンス」を創作している劇団ブックセトンだ。リラックス・パフォーマンスはバリアフリー演劇の一つの試みとして始められたものだが、これまで当たり前とされてきた劇場の慣習や環境、ルールを壊すと同時に、新しい公演美学を提示しているという点で注目を集めている。

劇団ブックセトンは2019年から「発達障がい者と共に創るリラックス・パフォーマンスの開発」を進めており、「プランQ」と名付けて連続プロジェクトを展開している。「Q」は「QUESTION」すなわち「問い」を意味する。さらに言えば、「舞台芸術を通じて私たちが生きる共同体、社会、世界で“正常”と呼ばれる規範に対して常に疑いを持って問いを投げかけ、その“正常”の範疇から外れた異質（クィア）な（QUEER）存在の生を見つめる」という意図を内包している。劇団ブックセトンは、「劇団ブックセトン×プランQ」と称して、文献調査や取材によって、発達障がいに関するリサーチを行った。「リラックス・パフォーマンス」の基本コンセプトである、発達障がい者のための「バリアフリー」とはなにかを根本的に捉え直し、「バリアフリー」を広く展開するためのリサーチとワークショップを実施したのだ。2021年と2022年に上演した2本のリラックス・パフォーマンス『トントントン』と『私の話をちょっと聞いて』がその成果だ。『トントントン』が子どもの観客を対象にしたとすれば、『私の話をちょっと聞いて』はより成人観客に比重を置いて作られた作品だ。お隣の日本では演劇だけでなくコンサートやバレエなど、さ

劇団ブックセトン『トントントン』　写真提供：劇団ブックセトン

まざまなジャンルでリラックス・パフォーマンスが導入されていると聞く。劇団ブックセトンを皮切りに、新しいジャンルであるリラックス・パフォーマンスが今後どのように展開されるか見守っていく必要がある。

西渓洞（ソゲドン）複合文化施設の建設をめぐる議論

2022年、韓国演劇界でもっとも熱い議論を巻き起こしたのは、ソウル特別区にあたる龍山（ヨンサン）区西渓洞で計画されている文化施設建設事業だろう。この計画は、現在、国立劇団(National Theater Company of Korea)が使用している西渓洞の敷地に、賃貸型民間資金事業（BTL方式）[6]として、大劇場（1200席）、中劇場（500席）、3つの小規模の劇場（300席、200席、100席）を含む地上15階、地下4階建ての複合文化施設を建設するというものだ。文化体育観光部は総事業費1千244億ウォンをかけて2023年7月に着工し、2026年12月末に竣工することを目標に、2022年12月現在事業者選定などの手続きを進めている。

だが、この事業をめぐっては、今なお演劇界と文化体育観光部の間の摩擦が収まらず、さらに、同じ舞台芸術の世界でも、演劇、ダンス、ミュージカルなど、ジャンルによって立場の違いが生じ、問題となっている。演劇界では、国立劇団が2010年から使用してきた敷地に演劇の上演には向かない大劇場を含む多目的の文化施設を建設するのは、国立劇団を象徴する空間を破壊するに等しい計画だとして強い反発の声が上がっている。一方、国内に専用劇場を持たないダンス業界や、需要に比べて公演の場が不足しているミュージカル業界の立場はまったく違う。11月21日には「創作・製作専用国立劇場とは何か?」というテーマで国会議員や有識者によるフォーラムが開催された。フォーラムのテーマから分かるように、演劇界は文化体育観光部が計画した「複合文化施設」の代わりに、作品のクリエイションとプロデュースに特化した国立劇場の建設を代案として提示している。国会ではすでに、多目的複合施設を建設する方向で予算執行計画が承認されており、計画変更を行うか否か判断が迫られている。建設計画を白紙に戻して最初から見直しを図るのか、それとも両者が劇的な合意に達するのか、今後注視が必要だ。

文化体育観光部が計画した西渓洞の複合文化施設建設に反対して演劇人たちはデモを行った　写真提供：ソウル演劇協会

（1） 「今年の舞台芸術市場規模、8,000億ウォンを越える……コロナ以前のレベルに回復」ハンギョレ新聞（2022年11月7日） https://www.hankyung.com/life/article/202211071295i （最終アクセス日：2023年3月15日）

（2） 韓国では公演法が改正され、2019年6月25日から劇場等運営者、公演の企画・製作者などは公演についての情報をKOPISに届け出ることが義務付けられた。これにより、作品別の累積観客動員数と興行収入を比較的明確に把握できるようになった。

（3） 李星坤著「5つのキーワードで現代を読み解く」（『舞台芸術と理論』第86号、舞台芸術と理論のための会、2022年6月発行、p. 116）参照。

（4） 多元芸術：美術、演劇、ダンス、映画、音楽、文学など、既存の芸術分野を越境し、横断し、混交するようなアートを指す韓国独自の用語。従来のジャンルに収まらない作品、アーティストにも政府の支援が届くよう、1990年代後半に作られたカテゴリー。

（5） 「ソウル国際舞台芸術祭2022、6日の日程で開幕……『転換』をテーマに23公演」イーデイリー（2022年10月4日） https://www.edaily.co.kr/news/read?newsId=03867126632489640 （最終アクセス日：2023年3月15日）

（6） BTL方式：民間の資金や技術力を活用して公共事業を行うための手法の一つで、「建設し（Build）」「移転し（Transfer）」「賃貸する（Lease）」の頭文字を取ってBTLと呼ばれる。民間の業者が施設を建てて政府に寄付を行い、政府は建物の建設費用や施設運営にかかる経費を、賃貸料として民間に支払って運営する。

Lee, Seung-gon

演劇評論家。韓国芸術総合学校演劇院演劇学科教授。同校卒業後、大阪大学文学研究科で博士号を取得。現在は在日コリアン劇団に関する研究、およびオンライン配信における観客のライブネスに関する研究に取り組んでいる。

（翻訳：石川樹里）